

第2部：実践報告・実践研究

英語の授業・学習において どのようにICTを活用していきけるか

① 実践報告

『言語活動を行う中でのICTを活用した実践と資質・能力の育成』

発表者・登壇者：俣野 知里 (京都市立二条城北小学校) / 酒井 英樹 (信州大学)

酒井先生：第2部の前半では、英語の授業・学習においてどのようにICTを活用していきけるか、実際の実践をもとに考えていきたいと思います。言語活動の中でのICTの活用にポイントを置き、京都市立二条城北小学校の俣野知里先生にお話しいただきます。よろしくお願いします。



俣野先生：現在は京都市立二条城北小学校に勤めておりますが、2022年3月までの3年間、京都教育大学附属桃山小学校の英語専科教員として、1年生から6年生までを指導しておりました。研究の重点の1つとしてICT教育に取り組んでいた附属桃山小学校では、私が赴任した時には既に1人1台端末の整備が進んでおり、独自の教科「メディアコミュニケーション科」での学習を通して、端末をどのように使うか、どのような点に気をつけたらよいかをよく知っている状態でした。外国語活動・外国語の授業は、私と常駐ALT、担任の先生とで教え、1、2年生は35時間、3、4年生は70

時間の外国語活動、5、6年生は公立と同じ70時間の外国語の授業を実施していました。

本日は、①「聞くこと」「話すこと」の学習、②「読むこと」「書くこと」の学習、③「振り返り」の3パートを柱にお話をさせていただきます。

まず、①「聞くこと」「話すこと」について、附属桃山小学校の第5学年の1学期に授業をしたUnit1自己紹介の実践例をもとに報告します。附属桃山小学校では、教科書『CROWN Jr.』を使用し、HOP、STEP、JUMPのステップを踏みながら、1学期間かけて段階的に力を伸ばしていくかたちで授業を進めていました(資料2-1)。

資料2-1

第5学年 Unit 1 (1学期) の流れ



6

考えの整理・自分のことについて伝える準備をする



指導者からのフィードバック



HOP段階では、コロナ禍の影響でオンライン授業が中心でしたので、児童に今の自分の力で言えることを録画記録してもらいました。そして、その動画と単元末時の自分とを比較して、変容に気づくことができる活動につなげました。

STEP段階では、自分のことについてALTに伝える活動をしました。学期を通して言える表現が増えていくので、随時書いたウェビングシートを見直し、書き足していけるようにしました。また、イヤホンマイクで自分の発話を録音し、聞き返し、分かりにくいと感じた部分は、言い直す等の活動を重ねました。また、活動を進める中で、児童が提出した動画へのフィードバックを数回行い、うまく言えたところにニコちゃんマーク、惜しかった部分にはびっくりマークをつけるなどして、よりよい紹介につなげました。また、動画を通じて1つだけALTに質問をし、それに対して返事がもらえるようにする等、英

語でのやり取りを楽しむことができました(資料2-2)。

JUMP段階では、チャレンジタイム(パフォーマンス・テスト)を設け、自分のことをALTに紹介する活動をしました。パフォーマンス・テストの様子は動画で記録し、振り返りや学習改善に活用できるようにしています。

続いて、②「読むこと」「書くこと」の学習です。外国語の「読むこと」「書くこと」の学習は、一般的には5年生から始まりますが、附属桃山小学校では私が赴任する前に研究開発校の指定を受けていた経緯もあり、外国語教育には1年生から取り組んでいました。中学年では週2時間の授業がありましたので、読み書きの素地になる活動は、3年生から取り入れていきました。共通教材Let's try!「アルファベットとなかよし」の内容を膨らませ、全7時間の単元計画を立てました(資料2-3)。最初は、

資料2-3

単元計画(全7時間)

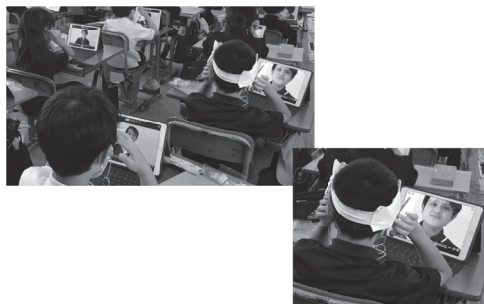
時	目標	主な活動 ○評価規準(方法) ※記録に残す評価:第6・7時
1	身の回りにはアルファベットの文字で表されているものがあることに気付くとともに、大文字の読み方を知る。	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りの写真や誌面から、アルファベットの文字を見つけたり、何を表しているかを考えたりする。 歌The Alphabet Songを聞く。 指導者のALPHABETクイズの様子を見る。 身の回りにはアルファベットの大文字で表されているものがあることに気付いている。(観察・振り返りシート)
2 3	大文字とその読み方に慣れ親しむ。	<ul style="list-style-type: none"> 歌The Alphabet Songを歌う。 指導者のWhat is the letter?クイズに答える。 指導者のALPHABETクイズに答える。 活字体の大文字の読み方を聞いたり言ったりして文字と一致させている。(第1時に同じ)
4 5 6	大文字とその読み方に慣れ親しむ、ある文字について尋ねたり答えたりして伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> 歌The Alphabet Songを歌う。 指導者のWhat is the letter?クイズに答える。 Get "M/Z" Gameをする。 指導者のALPHABETクイズに答える。 文字の形に着目して、グループを作る。 校内に隠れた大文字を探し、写真に撮る。 友達とのALPHABETクイズに答える。 大文字の読み方を聞いたり言ったりして、伝え合っている。(第1時に同じ)
7	相手に伝わるように工夫しながら、ALPHABETクイズを出したり、クイズに答えたりしようとする。	<ul style="list-style-type: none"> 指導者のALPHABETクイズに答える。 友達同士でALPHABETクイズをする。 相手に伝わるように工夫しながら、クイズを出したりクイズに答えたりしようとしている。(第1時に同じ)

身近にあるアルファベットの大文字を探すことから始め、読み方に慣れ親しむ活動、文字画像を指でなぞる活動などを通して、文字への興味・関心を広げていきました。

アルファベット26文字に一気に慣れ親しむことは難しいので、楽しみながら文字の形だけでなく、アルファベットの読み方にも繰り返し慣れ親しむ活動を行いました。さらに、マスクをしたままの授業では、口元を見ることができないため、ALTが自分の顔の横にアルファベットの大文字を書いたカードを示し、その読み方を言う動画を作りました。動画を見ながら学習している児童の様子を見ると、画面に映し出されたALTの顔の大きさが少しずつ違っていました。口元に注目し、大写しにして、真似をしている児童もいます(資料2-4)。AからZまでを1本にまとめた動画だったので、自分が聞きたいところ、知りたいところに焦点をあてた見方をする児童もあり、それぞれの学び方があることに

資料2-4

それぞれの学び方で学ぶ



改めて気がつきました。

自分で文字を書いてみたい気持ちが高まる4年生では、絵カードの一部を書き換えることや、例を見ながらオリジナルカードを作成する児童の姿がよく見られるようになってきました。個人端末のデジタル教科書を使い始める5年生では、テキストを端末に打ち込んだり、文字画像をなぞったり、文字を書き写して練習したりする姿も見られるようになりました。単語や文が少し読めるようになるの

で、単語カードを並べた文づくりや4線上に文字を書き写すことも始めます。ただし、端末では4線上に文字を書くことは難しかったので、書く活動は紙と鉛筆で続けました。数文程度の文が読めるようになる6年生では、音と文字のつながりを大切に、ALTの音声は何回も聞いた後に、英文を見せるようにしました。また、書きたいことが増えてくるので、用意した表現を参考にしながら、それぞれが書きたいことを書き写したり、自己紹介ポスターを作成したりする活動を行いました。

次に、「振り返り」についてです。小学校に外国語が導入された時から振り返りシートの活用を試みっていますが、今もまだ模索中です。1年生から6年生の発達段階に合わせた項目を設定し、できるようになりつつある自分を自覚できる振り返りシートを意識して作っています。振り返りシートは1年生から導入しており、学年に応じた項目を設定し、友

だちが考えた工夫にも視点を広げていけるものにしていきます(資料2-5)。

5年生、6年生では、ICTを活用した振り返りを行いました。5年生では、クラスの人数分のスライドを用意し、毎時間振り返りをしました。友だちのスライドを見ることもできるので、私が共有したいと思ったところは青字に変え、クラス全体で振り返る時間を次の授業につくるようにしました。自分の力が伸びたのは、どのような学び方によるものなのかを振り返りの視点とし、自らの目標に向かって学びを調整しようとする意識の高まりを狙っています。外国語の学習では、漢字や計算のように、できるようになったという明確な実感をもちにくいことがありますから、どのように学びを工夫すればできたのか、またできるようになるのかに意識を向けさせることで、自分に合う学び方を見つけるきっかけになればと考えています。単元を通して同じスライドに書き

資料2-5

学習の「振り返り」(第3学年2学期)

This is for you. 「だいせつなひとへ カードをおくろう」
Grade 3 Class () No. ()

Name
氏名

Lesson 8 楽しく学習に取り組みましたか。 ☹️ 😊 😊 😊 😊
学習にすすんでさんかできましたか。 ☹️ 😊 😊 😊 😊

月や形の言い方が聞いてわかりますか。
☹️ 😊 😊 😊
まだむずかしい 友だちや先生のヒントがあればいくつわかる 一人で 半分くらいわかる ぜんぶわかる

月や形を言うことができますか。
☹️ 😊 😊 😊
まだむずかしい 友だちや先生のヒントがあればいくつ書える 一人で 半分くらい書える ぜんぶ書える

相手にわかりやすく、ほしいものをたずねたり、答えたりすることができますか。
☹️ 😊 😊 😊
まだむずかしい 友だちや先生のヒントがあればできる 一人でできる いくつもくふうして 一人でできる

今日の伝え合いで、自分がかうしたことを書きましょう。
また、友だちのかうをみつけた人は、それも書きましょう。
何まいも同じものがあつたとき何まいいると
えいごでできたことがくふう

続けていくので、自分の変容にも気づき、友だちのよいアイデアも一緒に取り入れているようです。

操作に慣れた6年生では、より見やすいスプレッドシートを用い、振り返りコメントを各自が打ち込めるようにしました。5年生と同様に、私がみんなに見てほしいと感じたもの、これからの学習のヒントになりそうなアイデアは文字の色を変え、目がいきやすいようにしています。

最後に、これは現任校の5年生の振り返りシートです。京都市に戻り、使用する教科書やICTの環境が変わりましたので、振り返りシートも変えました(資料2-6)。自校や教科書のCAN-DOリスト等を参照し、単元ごとに1枚ずつ作成しています。各単元での到達レベルを4段階で設定し、毎時間の達成した段階に、学習した日付を加筆します。また、2時間に1回程度、振り返りコメントを書く時間を設けています。シートには、単元の初めに自分で設定

した目標、My Goalを書く欄を作り、好きな時に加筆できるようにしています。また、学習に関して友だちに相談したいことは青字で書き入れて、友だちと相談し合う時間をつくり、話し合えるようにもしています。振り返りコメントの記述を2時間に1回ずつにしている理由は、コロナ禍の影響等による積み上がり方の違い、学習時間の不足等で、振り返りの時間をたくさん取ることが難しいからです。ただ、自己変容は自覚してほしいので、日付だけは毎時間書き、振り返りコメントは2時間に1回程度にしています。振り返ることに慣れると、My Goalを意識でき、ゴール達成にどれほど近づけているかも見えるようになっていきます。

ここまで3つの柱に沿ってお話をさせていただきました。ICTが導入されるまでは、テキストを広げた机の上で作業をしていたので、次の時間にそれを使うことや友だち同士で見せ合うことに手間が

資料2-6

児童の振り返り

- <第1時>
11月4日:日付+記述
<第2時>
11月8日:日付
<第3時>
11月10日:日付+記述
<第4時>
11月16日:日付+記述

He can run fast. She can do Kendama. 「友達や先生のことをよりよく知るために、紹介クイズを出し合おう」 【Our Goal】自分や他の人ができることやできないことを紹介することができる。				
伸ばしたい力	今の自分の力			
聞くこと	できることやできないことを聞いて、理解しようとしているが、まだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、できることやできないことを聞いて、ほとんど理解することができる。	できることやできないことを聞いて、ほとんど理解することができる。	できることやできないことを聞いて、全て理解することができる。
日付		11/4 11/8	11/10 11/16	
話すこと 【やり取り】	友達とできるかどうかをたずね合っているが、まだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、友達とできるかどうかをたずね合うことができる。	友達とできるかどうかをたずね合うことができる。	相手の話に反応しながら、友達とできるかどうかをたずね合うことができる。
日付			11/10	11/16
読むこと	できることについての音声を聞いて、文字を指で追おうとしているが、まだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、できることについての音声を聞いて、文字を指で追うことができる。	できることについての音声を聞いて、文字を指で追うことができる。	できることについての音声を聞いて、ひたひたの通して文字を指で追うことができる。
日付				
話すこと 【発表】	先生にインタビューをしたが、できることやできないことを紹介することはまだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、先生にインタビューをして、できることやできないことを紹介することができる。	先生にインタビューをして、紹介することができる。	先生にインタビューをして、これまでに学習した表現も使いながら、できることやできないことを紹介することができる。
日付				
日付	自分にぴったりの学び方を見つけよう! 「学びの足あと」(①②について書く)			
11/4	①【My Goal】この学習できるようにしたいこと(とちゅうで付け足しもO) みんなのできること・できないことについてすべて理解できて、自分のことを言えるようになること。	②My Goal達成のための学び方の工夫(黒字) 先生の話し方や、手本の話し方をよく聞いて真似してみること。		
11/10	①My Goalについてできるようになってきたこと ながでできてながでできないのか友達に聞かれるようになりました。そしてそのような質問に答えられるようになりました。	②My Goal達成に向けてうまくいった学び方の工夫(黒字) うまくいかなかったのでみんなに聞いてみたいこと(青字) 手本を真似して言ってみたり、先生が言っていた言葉を覚えたりしたからできるようになった。		

かかりました。今では、各自がデータを提出するだけで、クラス共有ができ、次の時間も同じものが再現できます。また、児童にデジタルカメラを貸し出して使っていた時は、写真の撮り直しやプリントアウトが大変でしたが、1人1台端末では、すぐに撮り直しができ、児童自身でできるので、ICTの利便さ、時間短縮の効果を感じています。また、成果物等に赤字で添削すると、書き直しが大変になるので、付箋に書き込んだりすることが多かったのですが、端末上であれば、私の添削を見て、自分で手元にあるワークシートの間違った文字を消して直せるので、作品に赤字を残すことがなくなり、便利になりました。

言語活動におけるICTの活用はまだ模索段階ですが、教師が目指す児童の姿を明確にしてから、ICTの使い方を考えることが大事であると感じています。最初は、ICTで何ができるのか、どのようにしたら機器が動くのかを試すことで精一杯でしたが、機能をいろいろ試し、ある程度の機能が分かった時に、何のために使いたいのかに意識がいくようになり、児童につけたい力から機能の有効性を考えられるようになりました。この考え方は今も大事にしています。

ICTの活用において、児童のICT活用状況を把握することは大事です。他教科の授業での使用状況を把握していないと、これは知っていると思って用意したことが「やったことがない」ことだったり、逆に説明がいて思っていたことが「もう知っている」ことだったりします。説明に時間がかかることと、すぐにできそうなことをイメージできていることで、1時間の中に設定できる活動を変えられますし、他教科とのつながりを意識した、児童を広く見た有効なICT活用ができます。大きな枠で捉えたICTの活用が、大事だと感じています。以上です。ありがとうございました。



酒井先生：ありがとうございました。では、私からいくつか質問させていただきます。ICTは外国語だけでなく、他教科でも使っているので、ICT活用の状況を把握することが大事とお話しされていましたが、他教科で使っているが、外国語の授業で生かしていないことや、外国語の授業での使用方法が、他教科に広がっていくような教科間で「使うよさ」について、ご経験やお考えはありますか。

俣野先生：教科を問わず、ノートやワークシートを使用していた時より、共有がしやすくなりました。課題や回答結果等が、提出箱にデータ提出されるだけで、回答を自分の席で、画面で見ることができ、時間も短縮されました。また、教師が示すモデルよりも、友だちが作ったものや書いたものがヒントになることが多いので、データで簡単に共有できるよさを感じています。

外国語から他教科へ広がった使い方としては、オンライン授業が中心であった時期に、1年生に、指導者が英語で挨拶をする動画を送り、その返答として英語で挨拶をする様子を家庭で録画し、送り返してもらいました。「1年生でも動画を撮って送れる」ことに、他の先生も気づき、国語の音読や音楽の鍵盤ハーモニカを弾いている動画を提出させる活用へと広がりました。

外国語でのICT活用に難しさを感じるのは、例えば、国語や社会では、文字での情報がヒントになりますが、小学校での外国語は音声を中心としているので、文字は支援になりにくいことです。社会などで行う新聞等の資料の読み取りは、英語で

はまだ難しいので、資料の使い方には難しさを感じています。

酒井先生：小学校英語の場合、音声から入りますので、小学校でICTを扱う時には、文字に頼った活用にならない方が適切ということですね。

次の質問は、ICTを使い始めた最初の頃に格闘したことや、それまでの授業と今の授業で変わった点、あるいは変わらなかった点があれば教えてください。

俣野先生：私はICTが得意ではなく、児童の方が操作に慣れている、扱いに慣れている状況から始まりました。1人1台端末の活用で生まれる学びの多様性に、衝撃を受けました。動画の見方1つをとっても、活用の仕方は異なり、一人ひとりが学びやすい方法を用いればよいと感じ、そこから固定した考え方は減った気がします。

酒井先生：個別最適化というと少し難しく考えがちですが、小さいところでも学び方の選択しており、そのことに俣野先生がICTを活用することで気づかれ、それを今回教えていただいたと思います。

また、読み書き、文字学習では、ドリル学習的なものが多くなりがちですが、俣野先生は、気づきを増やす、それを基にやり取りをする、また児童自身が探しにいきたくなる気持ちを育てることを大事にされていますが、知識および技能の側面での指導でICTを活用する際に、気をつけている点、心がけている点がありますか。

俣野先生：やり方を固定してしまうと、そのやり方が合わない児童は辛くなることがあります。特にスローラーナーの児童は他の教科でも同じで、例えば3年生になると学習する漢字が一気に増えて難しくなり、特に書く活動で大きな差が生じてしまいます。書く活動において、間違った字を何度も書き続けるのは意味がありません。その場で私が気づければ違う部分を伝え、それ以降は正しく書けますが、全体を見る中で気づくことができず、集め

た結果、気づくこともあります。そのため私は、書く活動では、一度に同じものをたくさん書かせないようにしています。全員で取り組む量は多くせず、丁寧にしっかり見本を見て書くことにしています。もっとやりたい場合は、やりやすい方法にすぐにアクセスできるように、音声つきの絵カードやALTの動画を送り、教科書で見たらよい箇所や、どこから何を引っ張ってきたら自分の力がさらに伸びるかを示した情報を共有するようにしています。意欲のある児童は自ら積極的に活用し、サポートが必要な児童にはこちらから伝えて、気に入った方法で進めていけるようにしています。

酒井先生：今後、試してみたいICTの活用法はありますか。

俣野先生：今年度から京都市では、家庭学習として、紙の計算ドリルの代わりにAIドリルが導入されました。本校では端末を持ち帰り、使える状況ができていますから、今後は外国語も、家庭学習の1つとして取り組むことができるかもしれないと考えています。外国語の授業は週2時間しかありませんので、家でもやってみたいと思える学習、ドリルではなく、面白そうだからやってみたいもの、週2時間の間をつなぐものを考えたいと思っています。

酒井先生：これは中・高も同じですね。家庭学習の中でICTをいかに使い、工夫していくかは大事だと思いました。俣野先生、貴重な実践をご紹介してくださってありがとうございました。